

思春期の障害が重い場合における 発達の援助としての音楽療法の 研究

——養護学校での実践事例をもとに——

加 藤 紀 子

目 次

第1章 目的と問題

1-1 本研究の目的およびその背景

1-2 先行研究の概観

1-2-1 重度の障害児における発達の課題について——
生後第1・第2の発達の原動力の観点から——

1-2-2 発達障害児の音楽療法について

1-3 先行研究の検討と本研究の位置づけ

1-4 本研究の基礎となる理論的枠組みと用語の定義

1-4-1 「可逆操作の高次化における階層一段階理論」・生後第1の発達の原動力および生後第2の発達の原動力

1-4-2 加賀谷式音楽療法の成り立ちと実践

1-4-3 用語の定義

第2章 方法

2-1 対象児と調査時期・方法

2-1-1 対象児の設定理由および発達の特徴

2-1-2 調査時期

2-1-3 調査方法

2-2 調査結果の分析・整理方法

2-3 調査の妥当性と信頼性

2-3-1 内容的妥当性

2-3-2 概念的妥当性

2-3-3 外的妥当性

2-3-4 信頼性

第3章 結果

3-1 授業のエピソード記録を通しての対象児の変化

3-2 対象児の行動の量的な変化

第4章 考察

4-1 対象児の音楽療法的関わりを通しての考察

4-1-1 K児

4-1-2 N児

4-2 総合考察

第5章 結論と今後の課題

1 目的と問題

本研究の目的は、障害により発達の遅れがある思春期の生徒を対象として、教育活動における発達援助の側面を持った音楽療法的活動との関係を調べ、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」(田中、一九八五)の視点から発達の援助としての音楽療法を考察することである。そもそも第2者形成および第2者との第3者の共有過程は人格発達の基礎であり、また人間の全体的な発達において不可欠な過程であるといわれる。第2者の形成とは、互いに情動や意

図を共有しあえる相手の形成のことであり、また第2者との第3者の共有とは、第2者とのある対象物や人への共同注意である。重度の障害があり、発達に障害がある対象児は、様々な原因で外的なものへの志向性の高まりにくさが重要な教育的課題の1つである。そのような対象者には、特別に工夫された教育心理学的的方法論が必要とされ、養護学校においては対象者の特別なニーズに対応した発達援助法や教育方法が模索されている。そこで、本研究では、近年心理療法や発達援助法として福祉や治療教育の場で盛んに行われている音楽療法をとり挙げ調査することとした。

音楽活動は乳幼児や障害児・者に対しては発達促進の方法として経験的に使用されてきた経緯がある。音楽療法としての発達援助的音楽活動は、海外でも早くから障害児への発達援助法として活用されてきており、日本においては加賀谷（一九七八）が、障害児音楽教育の実践の中で特に精神発達に遅滞がある対象児（者）を念頭におき、音楽の適応と効果を述べている。本研究では、外的なものへの志向性の発生から第2者の形成、第2者との第3者の共有という観点から、重度の障害児の発達心理を理解する手がかりとして、田中（一九八五）のいう「生後第1の発達の原動力の誕生（通常生後4ヶ月頃）」とその前後、および「生後第2の発達の原動力の誕生（通常生後10ヶ月頃）」とその前後の発達段階に注目した。生後第1、第2の発達の原動力の発生時において、障害児は発達障害を顕在化させやすく（白石、一九九四）そこで共通していることは、「生後第

1の発達の原動力生成時の発達障害」では「2分的感覚」を、「生後第2の発達の原動力生成時の発達障害」では「2分的対象」を固定化し、抵抗を克服していくことがみられにくい。その生後第1の発達の原動力の誕生および生後第2の発達の原動力の誕生に未熟さがあると考えられる思春期の生活年齢の男女2名を対象として、養護学校で授業の一環として行われている音楽療法的関わりに対する対象児の反応を半年にわたり調査し、その知見をもとに発達の援助としての音楽療法に関する考察を行う。

2 方法

（1）調査時期・二〇〇三年五月から一〇月

（2）手続き

a）教室にて毎週火曜日・金曜日の4講時（午前11時～11時40分）に実施される「II・C、III」グループの音楽の授業を週1回の間隔でビデオ録画する。後ほど録画をもとに観察記録用紙に対象者・項目ごとに記録をおこなう。

b）行動記録項目について

①第2者形成 ②第2者との第3者の共有 ③集団参加

①②③について、A上部連関・B下部連関・C基本連関にわけ、行動を分類する。観察記録から各項目にあてはまる行動をカウントする。

c）授業全体の様子、対象児の質的記録を行う。

d) 11月に「II・C、III」グループの音楽授業に関する教諭に2児の反応についてのアンケートを実施する。(第2者形成時の「共感」を教諭側からみてどのように感じたかを主な質問項目とする。)

※授業構造

〈参加者〉 N県立養護学校高等部1～3年生(「II・C、III」グループの生徒8名)

〈時間・頻度〉 週2回・40分

〈担当者〉 主担当教諭・1名、サブ担当教諭・4～6名

〈場所〉 高等部普通教室

※この音楽の授業は発達課題別に編成されており、高等部1年生～3年生までの生徒8名が参加している。いずれの生徒も発達年齢1歳前後～2歳であり、最も発達課題の低いグループに所属している。

(3) 対象児の発達の検討

対象児の発達状態を知る手がかりとして、以下の情報収集を行い検討する。

①学校内での日常生活の観察 ②担当教諭からの対象児に関する情報の聴取 ③発達検査の実施(白石(一九八五)の10ヶ月の力の発達診断の視点・その他より項目を設定、道具は新版K式発達検査のものを使用。)

〈K児〉 一九八六年生・発達障害による発達のアンバランスさがみられ、白石(一九九四)のいう「2分的対象の形成」の状態と発達

の諸力の形式的なものとの内容的なものの乖離が起きている状態があると考えられる

〈Z児〉 一九八六年生・発達障害による発達のアンバランスさがみられ、白石(一九九四)のいう「2分的感覚の形成」の状態と発達の諸力の形式的なものとの内容的なものの乖離が起きている状態があると考えられる

(4) 調査結果の分析と整理方法

事象見本法を用い、対象者の特定の行動に焦点をあててその変化を観察・記録・分析する。項目ごとに変化の量的分析と記録からの質的な分析を行う。また本研究の調査対象は、障害児の音楽療法として普及している、「加賀谷式集団音楽療法」をベースに活動が行われている音楽療法的活動である。

3 結果と考察

K児は、日によって情緒面の不安定さによる「こだわり行動」やパニックが顕著になり、行動生起回数にばらつきは見られるものの、全体的に①第2者形成は、②第2者との第3者の者の共有よりもよく観察された。K児の場合、特に「ふれあい活動」における①2者形成の生起が多く、また満面の笑みを担当教諭に向ける、笑い声を向けるなど、快の情動に結びついて生起していた。人(第2者)への気持ち穏やかに持続して、リラックスできていたように見受けられる。②「第2者との第3者の共有」は直接的な物のやり取りより

も、ふれあい担当教諭が「一緒にやろう」と手を差し出すと、自らその上に手を重ねるなどの意図の共有が見られ、そこで人とのつながりが認識されていた。「ふれあい活動」のリズミカルなスキンシップはK児にとって快の情動で受け止められ、①「第2者形成」に、また「音を聞く活動」は、音を聞く活動を媒体として②「第2者と第3者の共有」に少なくともプラスに働いているのではないかと考えられる。③集団参加では、K児はバルーンの中に入り楽しそうにリズミカルな動きをする、バルーンの端を持って笑顔で参加するなどのはっきりした行動を示している。少なくとも快の情動が介在してのK児の集団への関与していると考えられる。

また活動全体に渡り、箱の中のおはじきや紙片に息を吹きかけることにこだわってしまい、外界に気持ちを志向していけない状況におちいるような光景が何度かあったが、観察回数が後半になってきたころ、2分的対象の形成の状態に陥っても、また集団や他者への関心に気持ちを向けることができていた。

N児の観察期間での①③に関する行動特徴は、①第2者の形成が相対的に多かった。当初音楽療法的活動中の移動がかなり多く、自己刺激的に常同行動を繰り返しながら1人で歩き回る姿が多かった。相手に触られることに拒否的であり、教諭がK児に関ろうとするとすぐにふらふらと歩いていってしまうことが多かったが、観察後半に入り「ふれあい活動」での拒否的態度が減り、リラックスして正面を向いて活動にのぞむことができてはじめていた。③集団参加

では、N児は集団の雰囲気を感じるという意味で、特定の好きな音楽がかかることにより明らかに表情や声、行動を変えて反応しており、バルーンの近くに寄っていく、寄らずともバルーンの周りを歩くなどの集団の雰囲気を感じるような行動が見られ、ほぼ毎回の音楽授業で確認された。Nの場合、自分の感覚刺激の世界に入ってしまう以前に、バルーン活動で集団の渦ができており、そこに否が応でも反応せざるを得ない位の強い集団の吸引力に、N児のお気に入りの特定の音楽が付与されたことで、より快の情動として集団の雰囲気を感じることができたのではないかと考えられる。

4 結論と今後の課題

本研究での音楽療法的活動は、調査の結果から、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」における生後第1・生後第2の発達の原動力に未熟さがあると考えられる対象者2名に対して、音楽を使用することでリズミカルな快の情動にのせやすい、また集団の渦をより作っていきやすいという特性があり、さらにそれにより、①第2者の形成が促されやすく②第2者との第3者の共有のきつかけを作り出しやすく③集団参加が促されやすいのではないかと考えられた。

生後第1・第2の発達の原動力に未熟さがあるような発達障害のある対象者は2分的世界の形成に陥りやすく、「可逆操作の高次化における階層一段階理論」で問題とされている、「人との関係の中

子ども観の捉え直しが学校カウンセリングの発展に与える影響

齊 藤 満

目 次

1	目的と問題
1-1	目的およびその背景
1-2	先行研究の概観
1-3	先行研究の問題点と本研究の位置付け
1-3-1	先行研究の問題点
1-3-2	本研究の位置付け
1-4	本研究の基礎となる理論的枠組みと用語の定義
1-4-1	本研究の基礎となる理論的枠組み
1-4-2	用語の定義
2	方法
2-1	対象と調査時期
2-2	調査方法
2-8	調査方法の妥当性
2-4	調査結果の整理方法
3	結果
3-1	各調査項目の結果
3-2	調査項目の分析
4	考察
4-1	項目別の考察
4-2	調査項目の分析結果に関する考察

での人格発達や全体的発達」が導かれにくく、故に発達の階層を越えていくための生後第1・第2の発達の原動力が導かれにくい。本研究では、人格発達の基礎である「第2者形成」・「第2者との第3者の共有」を問題としてそれを導くための発達援助的方法として音楽療法の事例をとりあげたが、対象児にとってこの活動が初年度の半年間のみの観察であるので、「発達的变化」として確実な結果が得られたとはいえないが、毎回の活動での表出する姿から、少なくとも生活場面や児の全体的発達状況を考えあわせた時に音楽療法的活動が有用ではないかと考えられた。音楽が「快の情動」に関与し、人との関係を結ぶ際のよい媒体となりえる可能性は示唆された。しかし発達障害等の個々人により差のある、特別なニーズを抱えるような対象者には、本人が受容できる感覚にあわせた音楽・雰囲気提供に配慮が必要であり、これは「音楽」という、感覚や情動に関与する媒体であるがゆえであるといえる。本研究のように集団で行うタイプの音楽療法では、調査から集団で行うことの発達の援助としての有用性と、個々人のニーズにあわせた援助の両立に課題が見出せた。